

## 「郊居賦」における沈約の空間意識

董 子 華

はじめに

梁の天監六年（五〇七）、六十七歳の沈約は都・建康の東郊に居宅を構え、のちにこの郊居をテーマにして「郊居賦」を撰した<sup>①</sup>。この賦は全四百五十二句、約三千字あり、構想と執筆に心血を注いだ大作である<sup>②</sup>。沈約の隠逸への憧憬を述べて、自適な郊居生活を描写しているだけではなく、先祖の流浪の歴史と六朝の王朝の交代をも振り返っており、彼の歴史家としての一面が見られる。また、文学者、歴史家であるほか、沈約は仏教の専門家でもあり、彼の仏教的世界観も「郊居賦」の中に表れている。沈約は天監十二年（五一三）に没していることから、「郊居賦」は自伝的性格を持ち、彼の晩年の思考様式を表しているといえる。

『爾雅』釈地には、「郊」について「邑外、之を郊と謂う」という。「邑」は都、町で、「郊」は都の外の空間である。南朝に至ると、建康東郊の開発が進み、皇室・士族たちの別業と荘園や、僧侶・道士の寺院が次々と建てられた<sup>③</sup>。しかし、「郊居賦」に見出される「郊」という空間は、実在の東郊そのものではなく、むしろ沈約によって構築された私的で、理念的な空間といえる。この空間は作者の隠逸への憧憬、歴史への思い、仏教の浄国への希求と緊密に繋がり、彼の視点と心境の変化によって、多様な様相を呈している。言い換えれば、「郊」は沈約の筆によって加工された、文学的トポスになっていると考えるとよい。

本稿は沈約「郊居賦」における「郊」という空間に目を留め、沈約の諸思想が表れたこの文学的トポスの有様を考察することによって、「郊居賦」における沈約の空間意識を明らかにしたい。「郊居賦」の原文は『梁書』沈約傳に載せるものに従い、また、書き下し文は今場正美氏の「沈約『郊居賦』譯註」<sup>⑤</sup>を参考とする。

### 一 寥廓と荒茫——「郊」の全体像

「郊居賦」の内容については、中森健二氏と林家驪氏によって、すでに詳しく整理されているが、論述の便宜のため、本論に入る前に、筆者なりにあらためて簡単にまとめておきたい。

まず、凡俗な自分は他の万物とともに、自らの性を得る「場」が必要であり、そのため、東郊への隱棲を希求するという。次に、沈氏一族の歴史と齊梁の交代を振り返り、東郊での隱棲に至る経緯を述べる。続いて、居宅内部の自然景物と自給自足の生活を描く。その後、視線を居宅の外へと移し、東郊の自然と遺跡を眺めながら、湮滅した王朝や自分の過去に思いを馳せる。繁榮の儂さを意識し、現実を離れて神仙の世界への飛翔を想像した上で、再び東晋と宋の歴史を振り返る。そして、神仙の降臨を求めつつも、その願いが叶わず地上に戻る。やがてこの生の重要さを実感し、「郊居」に己の身を寄せて、仏道を修行する志を示す。しかし、すでに東郊の自然と同化する自己をそこに見出したため、この「場」を去ることができないという。そして、結びにおいて、沈約は、功なき自分の老衰を嘆き、東郊に余生を送る願望を述べる。

賦の全篇は現実と自らの思いが交錯しているが、全て「郊」という空間をめぐって展開している。つまり、沈約にとって、「郊」はただ我が身を寄せる場所であるばかりではなく、その精神を落ち着かせる空間であるともいえよう。さて、彼によって作られたこの「郊」はどのようなものか。

「郊」の全体像を把握するため、まず、賦の冒頭、すなわち序文に当たる段落を見てみよう。

惟至人之非己、故物我而兼忘。自中智以下洎、咸得性以爲場。獸因窟而獲聘、鳥先巢而後翔。陳巷窮而業泰、嬰居湫而德昌。僑棲仁與東里、鳳晦跡於西堂。伊吾人之編志、無經世之大方。思依林而羽戢、願託水而鱗藏。固無情於輪奐、非有慾於康莊。披東郊之寥廓、入蓬藿之荒茫。既從豎而橫構、亦風除而雨攘。

至人は自己を忘れて道と一体となり、物と我を忘れる。中智から下愚に及ぶまで、自分の性に適う所を落ち着く場所とする。獸は穴があるので駆け出すことができ、鳥もまず巢を作ってから飛んで行く。陳平は城郭を背に負うところに侘しく住みながらも訪れる客が絶えず、晏嬰は湿地に暮らしつつも徳を顕した。子産は仁者として東里に住み、高鳳は西唐山にその身を隠した。褊狭な志を持ち主である自分は、国を治める才を有していない。鳥のように森の中に羽を収めて、魚のように水の中に鱗を隠すことを願っている。もとより豪華な屋敷に興味はなく、繁華な都市にも心惹かれはしない。遥かに広がる東郊をひらき、草の生えている荒野に向かうのだ。すでに柱を立て梁を据え、風雨を防ぐ設えもできている。

自分が「中智」以下の凡俗の者であり、獸や鳥のように、自らの性を得て自由自在に生きる「場」が必要であるが、望んだのは豪華な邸宅や繁華な都市ではなく、都を遠く離れた東郊であるという。「獨往」の志、乃ち隱棲への憧れを表している。

沈約は「郊」の全体的な様子を「寥廓」「荒茫」と形容している。「寥廓」は遥かに広がるさまで、「荒茫」は荒れ広がるさま。陳平、晏嬰、子産、高鳳は徳の高い士であるが、みな繁華の地ではなく、人里離れた場所に住んでいる。また、『宋書』隱逸傳論において、沈約は『易』・『論語』を挙げて、従来の隱士は俗世を離れて奥深いところ身を隠すという。「寥廓」「荒茫」はいずれもそうした隱棲の「場」に相応しい表現である。また、齋藤希史はこの描き方が招隱詩の表現に似ていて、沈約の孤高の隱逸の志を表していると指摘している。ところが、「寥廓」と「荒茫」は視覚的な表現で東郊の様子を表しているだけではない。感覚的な表現として、賦の感情的な基調にも繋がっていると考えられる。

沈約は「郊」を都から遥かに離れた雑草の生い茂る空間に見立て、そこに自分の居宅を構えるという。その過程を「爾れ乃ち窮野に傍い、荒郊に抵る。霜蒨を編み、寒茅を葺く（爾乃傍窮野、抵荒郊、編霜蒨、葺寒茅）」と描き、人里離れた荒れ野の続く東郊に至り、霜の降ったオギを編んで、冷たい力やを葺いたと述べている。「窮野」「荒郊」は「寥廓」「荒茫」を具象化する。「霜」と「寒」は冷たい感覚であり、物寂しい雰囲気を出している。「蒨」と「茅」は房屋を建てるために使う材料であるが、簡素なイメージがあり、果てない荒野を連想させる。繁華な都と連続する現実の東郊と比較すると、沈約が賦に描くこの空間には一層の物寂しさが感じられる。

このイメージは賦の終盤にまで通底する。「氷は坎に懸かり坻に帯び、雪は松を縈り野を被う（氷懸坻而帶坻、雪縈松而被野）」とあり、窪みに掛かった氷が水際まで張りめぐり、雪が松に積もり広野をおおうという郊外の冬景色を描いている。「氷」と「雪」は冬の景物で、「霜」と「寒」によく繋がり、秋から冬への季節の移ろいを示している。

そして、沈約が視線を居宅外の世界、即ち広袤たる東郊へ移し、王朝の盛衰や自分の過去を振り返る時、その寂寥感はさらに深まっている。かつての王朝はすでに滅し、東郊の塵になっている。昔活躍した自分の面影は目の前に浮んできたが、その頃一緒にいた知り合いはみな時の流れとともに去ってしまった。今日に入るのは、鍾山の連綿たる山々だけ。昔の繁華と今の荒涼が強烈な対比を示し、賦における寂寥感は世の無常に対する悲哀に重ねられる。

「郊居賦」以外にも、沈約は郊居に関する詩を作った。次の「宿東園」詩は「郊居賦」とほぼ同じ時期の作品である、この詩における「郊」のイメージも見てみよう。

宿東園 東園に宿す

1 陳王 鬪雞道 陳王 鬪鶏の道

2 安仁 采樵路 安仁 采樵の路

3 東郊 豈異昔 東郊 豈に昔に異ならんや

4 聊可 閑余歩 聊か余の歩みを閑うすべし

- 5 野徑既盤紆 野徑既に盤紆たり  
 6 荒阡亦交互 荒阡亦た交互す  
 7 槿籬疏復密 槿籬 疏にして復た密つ  
 8 荊扉新且故 荊扉 新たに<sub>レ</sub>して且つ故し  
 9 樹頂鳴風颯 樹頂に風颯鳴り  
 10 草根積霜露 草根に霜露積む  
 11 驚麝去不息 驚麝 去りて息まらず  
 12 征鳥時相顧 征鳥 時に相い顧みる  
 13 茅棟嘯秋鷗 茅棟 秋鷗嘯き  
 14 平岡走寒兔 平岡 寒兔走る  
 15 夕陰帶曾阜 夕陰 曾阜を帯び  
 16 長煙引輕素 長煙 輕素を引く  
 17 飛光忽我適 飛光 忽として我に適り  
 18 寧止歲云暮 寧ぞ止<sub>レ</sub>た歲の云に暮るるのみならんや  
 19 若蒙西山藥 若し西山の藥を蒙れば  
 20 頽齡儻能度 頽齡も儻は能く度らん

野原の小道を歩みながら、東郊の冬の景色を味わう。5から8までの四句は「野徑」「荒阡」「槿籬」「荊扉」などを描き、東郊の道の険しさと東園の外観の素朴さを表している。9、10という二句は強く吹いている風や積つた霜と露が冬の寒さを示している。11から14までの四句における「驚麝」「征鳥」「秋鷗」「寒兔」などの動物からは、さらに東郊の荒れ果てて寂しい様子が感じられる。また、末の四句には、「過ぎ行く月日は不意に私に迫り来る。それは

ただこの一年が暮れるだけのことではない。もし西山の仙薬を飲むならば、この朽ち果てつつある命でも、あるいはまだ続けられるであろう」といい、時間の流れと自分の老衰を嘆いている。東郊における秋・冬の自然景物を見渡し、時の流れを感知する。また、季節の移ろいから我が身の老衰を連想する。この詩における「郊」のイメージは賦の序文における「寥廓」と「荒茫」に一致し、作者の悲哀に繋がっているのではないか。

再び賦の後半に目を移そう。遊仙的な瞑想の中、沈約は神霊の降臨を希求するが、神霊は彼の願いに応じなかった。そして、彼は仏道修行によって、「空を覲じ、己を忘れる」という自己超克の境地に至ることを望むが、結局現実にある自分の老衰と政治的な不遇を忘却できず、現実の苦痛から抜け出せない。賦の文末においては、「余の情の頽暮を傷み、憂患に罹りて其れ相溢る。悲は軫を異にすれども帰を同じくし、歎びは方を殊にすれども並に失う（傷余情之頽暮、懼憂患其相溢。悲異軫而同歸、歡殊方而並失）」といい、晩年になると、喜びが少なく、憂いと悲しみが心に満ち溢れているが、人は死ぬと、喜びも悲しみも皆消えてしまうと述べている。さらに最後の六句において、「惟だ以えらく天地の恩に報いず、書事の官も述べる靡く、徒らに高門の地に重んぜられて、良史の筆に載せられず。長く太息して其れ何を言わん、羌愧心の一に非ず（惟以天地之恩不報、書事之官靡述。徒重於高門之地、不載於良史之筆。長太息其何言、羌愧心指非一）」という。「天地の恩に報いることなく、何も書き記す価値もない。分不相応にも高位に据えられているが、史官の筆に記されるほどの功績もない。長く溜息をついて何も言うことなく、我が心に恥じることばかりである」と嘆息している。

沈約は梁の建立に大きな功績があつた一人であり、新王朝において活躍すべく大きな期待を抱いたが、結局は政治上の枢要な地位を得ることはなかつた。彼の官職への執着を考えてみれば、この結びは謙虚な言い方であるが、やはり彼の憤懣と悲哀を示しているであろう。

以上の考察から、「郊居賦」における「郊」という空間の全体像を概観した。「郊」は荒れ果てて物寂しい空間であり、沈約の悲哀を表している。沈約は今の東郊にある山々と遺跡を眺めながら、昔の繁華の東郊に思いを馳せて、世の無

常と自らの老衰を嘆き悲しんでいる。

## 二 歴史を映し出す空間

前章で「郊」の全体的なイメージを考察した際に、「郊居賦」において、沈約が王朝の歴史と過去の自分のことを思い出し、世の無常を嘆いているという点に触れた。「郊居賦」から時の流れと沈約の歴史観が伺えるということについては、藤原尚氏、中村健二氏、齋藤希史氏がすでに言及している<sup>③</sup>。本章は、「郊居賦」における歴史を見つめる叙述を分析し、歴史を映し出す空間とした「郊」と沈約との関係を明らかにしたい。「郊居賦」において、歴史の振り返りは三回あると考えられる。順を逐って見てみよう。

### (一) 一回目の振り返り——昔西漢之標季、余播遷之云始……詠希微以考室、幸風霜之可庇

東郊への隠居に至る経緯を述べる。まず、前漢の末に始まる先祖の流浪から、晋・宋の乱世に遭遇した父祖の苦難まで遡り、王朝の更迭に翻弄された一族の運命に思いを馳せる。続いて、「平生の耿介を述べ、実に心を独往に有つ。幽人を思いて軫み念い、東皋を望んで長想す（迹平生之耿介、實有心於獨往。思幽人而軫念、望東皋而長想）」といい、先祖の歴史を承けた自分の隠棲への希求を述べる。平素より隠棲に憧れ、常に昔の隠者を思つて心を巡らせ、東の丘を眺めながら長く思いにふけていたと。しかし、「本より情を徇物に忘れ、徒だ紐を天壤に繋ぐのみ。応は歎を牽絲に屢し、陸は言を世網に興す。事は滔々として未だ合わず、志は帽帽として爽らかなる無し。帰嘆を詠じて躑躅し、巖阿を眷みて抵掌す（本忘情於徇物、徒羈絆於天壤。應屢嘆於牽絲、陸興言於世網。事滔滔而未合、志帽帽而無爽。詠歸歎而躑躅、眷巖阿而抵掌）」というように、本来の性情を得た生き方を忘れ、俗世の名利に自分の身を束縛され、隠棲への願望は叶わなかった、という。

続いて、斉末の混乱と梁の建立と自らの生涯を顧みる。「時君の徳を喪うに逢い、何ぞ凶昏の孔だ熾んなる……凶を銜むの盛世に値い、聖を興すの嘉期に遇う……希微を詠じて以て室を考すに、幸に風霜之れ庇う可し（逢時君之喪徳、何凶昏之孔熾……直銜圖之盛世、遇興盛之嘉期……詠希微以考室、幸風霜之可庇）」

斉の東昏侯の統治による民の苦しみを嘆き、蕭衍が梁を建てたことを喜んでゐる。そして、梁の建立以来、自ら武帝に優遇されてはいるが、常に無常と不安を抱き、ついに東郊へ隠棲しようとして決心したと述べている。

この過去から現在を見渡す叙述によって、沈約は沈氏の先祖と王朝の歴史、また自分自身のことという三者を結びつけている。おそらく歴史家である沈約は自分を一人の個体とはみなさず、歴史の一部分として自分のことを述べているのである。つまり、彼が東郊に隠棲することは自分だけの決意ではなく、王朝の変遷とその変遷に翻弄された先祖の運命にも関わっている。従って、沈約が「郊」での隠棲はこの場所に我が身を寄せるといふ意味だけではなく、自分の内包している歴史的な記憶も「郊」に置く意味も含まれていると考えられる。

(二) 二回目の振り返り——臨異維而聘目、即堆冢而流眄……咸夷漫以蕩滌、非古今之異時

居宅内の自然景物と自給自足の農耕生活を述べた後、沈約は自分の視線を居宅の内部から外部へ移している。広袤たる東郊を眺めながら、この地にあつた歴史事件と人物や自分の過去に思いを馳せる。ここから沈約は東晋、宋、斉の盛衰を振り返って、再び歴史的な叙述を始める。

沈約は宋、斉、梁の三朝に仕えたことがあるため、王朝の歴史を回想する時には、自ずとそこに過去の自分の姿も見いだす。かつて宋の西陽王に随い、東郊にある鍾山へ遊びに来ており、「遊鍾山應西陽王教」（『文選』卷二十二）の連作五首を作った。斉の永明年間、沈約は文惠太子蕭長懋に仕え、また、文惠太子の子である竟陵王蕭子良の西邸に招かれ、文学創作や講経活動を行った。その経歴については、次のように、『梁書』沈約傳に記されている。

齊初、爲征虜記室、帶襄陽令。所奉之王、齊文惠太子也。太子入居東宮、爲歩兵校尉、管書記、直永壽省、校四

部圖書。時東宮多士、約特被親遇。每直入見、影斜方出……時竟陵王亦招士、約與蘭陵蕭琛、琅琊王融、陳郡謝朓、南鄉范雲、樂安任昉等皆遊焉。

齊の初め、(沈約は)征虜將軍の記室となり、襄陽の令を兼ねた。奉じた王は齊の文惠太子であった。太子が東宮に入ると、(沈約は)歩兵校尉となり、書記を掌り、永寿省に当直し、四部の圖書を校訂する。その頃、東宮には有能な士多くいたが、沈約は特別に親遇された。彼は当直の度にお目にかかり、日影が斜めになつてははじめて退出した……時に竟陵王も亦た有能の士を招いており、沈約は蘭陵の蕭琛、琅玕の王融、陳郡の謝朓、南郷の范雲、樂安の任昉らと、みな竟陵王の西邸に遊んだ。

しかし当時の榮華は儂いものであり、「總帷一朝にして冥漠たり、西陵は忽ち其れ葱楚たり(總帷一朝冥漠、西陵忽其葱楚)」というように、かつての王朝の繁榮は今全て「霜霧と共に歌滅し、風雲と消散せざる莫し(共霜霧而歌滅、與風雲而消散)」となり、時の流れの中に湮滅した。

### (三) 三回目の振り返り——觀二代之瑩兆、觀摧殘之餘燼……余世德之所君、仰遺封而掩淚

沈約は歴史を振り返る際に、主体的な意識を強く持っている。彼は単に歴史を振り返るだけではなく、流れる時間の中における自分自身、また自分の先祖にも目を向けている。自らの思いを神仙世界へと飛翔させるという想像世界から現実の東郊に戻った後、再び東晋と宋の歴史を遡って、「惟れ聖文の武を續ぐに、殆ど隆平の至る可し。余の世徳の君とする所、遺封を仰いで涙を掩う(惟聖文之續武、殆隆平之可至。余世德之所余世德之所君、仰遺封而掩淚)」と、かつて父祖が仕えた宋の武帝劉裕と文帝劉義隆のことを想起している。彼は父祖の存在を王朝の歴史の中に確認することを常に意識しており、またそこから、自らの在り方を確かめていると考えられる。

沈約は歴史的な視点から自分の生涯を振り返って、隱逸への志を示しているため、「郊居賦」は自伝的な賦と認められている。しかし、この賦の自伝的な性格はこれだけではない。

沈約の運命は王朝の交代や先祖の歴史に緊密に繋がっている。一方で、現実の健康の東郊は都の延長線のような存在であり、かつての歴史がここに積み重なっている。要するに、沈約と「郊」という空間は時の移ろいとその中に展開した王朝の交代・変遷を共有している。また、歴史家としての自覚を持っているため、彼にとつて時間的な視点から事物を究明することは自然な考え方である。一方で、「郊」は空間であり、人間のように事物を感知することができないが、広袤たる自然空間には万物の道理を内包している。言い換えれば、沈約は我が身をもつて歴史を觀照し、「郊」は空間をもつて流れる時間を記録する。沈約が「郊」という空間において、歴史を振り返ることは、まるで鏡で自分の像を映すことのようにであると考えられる。

### 三 万物と同化する空間

沈約は仏教思想から養分を吸収し、自分の思想の基盤を作っている。「郊居賦」にも彼の仏教思想が現れる。神塚淑子氏は沈約の仏教思想と隱逸觀の關係について考察し、「沈約の神仙思想への飛翔と仏教世界への沈潜が結果的に同じものであり、彼がそのような行動を通して、相対性と限定性を超越した自由な存在になり、眞の隱逸を実現することを望んでいる」と述べている。また、吉川忠夫氏は沈約の仏教思想について詳しく論じて、「沈約にとつて、仏教は慈悲の教えとして受けとめられている」と指摘している。

沈約は「究竟慈悲論」を作り、仏教の慈悲の教義によつて、万物の生を重んじ、それぞれの生まれつきの性に従うことを主張している。

釋氏之教義本慈悲、慈悲之要全生為重。恕己因心以身觀物、欲使抱識懷知之類、愛生忌死之群、各遂厥宜得無遺天。仏教の根本的教義は慈悲であり、慈悲の要諦は生を全うすることを重んじる。己を恕して心を従い、我が身を以つて万物を觀て、認識と知恵を持つ者と、生を愛し死を憎む者に、それぞれに自分の宜しきを得させて、夭折

しないようにさせる。

その仏教の慈悲の教えは「郊居賦」にもしばしば現れる。第一章にあげた序文には、自分は鳥、魚と同じく、自らの性に従う場所が必要であると論じている。また、居宅内の動植物を描く時、魚の様子を「小なるは即ち渚に戯れて文を成し、大なるは即ち流れに嘖きて白を揚ぐ。羨を江海に興さず、聊か余の宅に相忘す（小則戲渚成文、大則嘖流揚白。不興羨於江海、聊相忘於余宅）」と描写する。後の二句は『莊子』大宗師における「魚は江湖に相忘れ、人は道術に相忘る（魚相忘乎江湖、人相忘乎道術）」から由来し、様々な魚が沈約の居宅で自分の性に従い、満足して生きているという。さらに、賦の後半に「（余の志を淨国に棲まわせ、余の心を道場に帰す。獸は墀に依りて駭く莫く、魚は沼に物ちて網せられず）棲余志於淨國、歸余心於道場。獸依墀而莫駭、魚物沼而不網」とある。前の二句は自分のこの「郊」を道場にして、仏道を修行する志を述べており、後の二句は再び獸と鳥が「郊」で自由自在に生きることができるといふ。

沈約は自らの生の重要さを意識し、視線を居宅内部の風景に移し、周りの植物を注視している。

晚樹開花、初英落蕊。或異林而分丹青、乍因風而紅紫。紫蓮夜發、紅荷曉舒。輕風微動、其芳襲余。

風騷屑於園樹、月籠連於池竹。蔓長柯於簷桂、發黃華於庭菊。

遅咲きの花が開き、早く咲いた花がその蕊を落とした。別々の林の木々は青やら赤やら分かれていたが、急に風が吹くと、紅と紫が交じり合う。紫色の蓮の花が夜に開き、赤い荷が朝に咲く。軽やかな風が微かにそよぐと、その香りが私を包む。風は庭園内の木々にさやさやと吹き、月は池の辺りの竹に照らす。桂の木は長い枝を簷に伸ばし、庭の菊は黄色い花を咲かせる。

庭園の中に生えた植物は様々であるが、皆この静かな夜にありのままに生きている。沈約は植物のそれぞれの精妙な動きを捉え、調和した世界を描いている。

また、彼は「（並に時物の懐くべく、外より来ると雖も仮るに非ず）並時物之可懐、雖外來而非假」といい、それ

らの時節の物が自分の外から来た物であるが、仮の物ではないと述べている。この我が身の万物と同化した「浄国」は、まさに沈約の望んだ「己を忘れ、空を觀る」という境地であり、彼の真の隱逸觀を示していると考えられる。

沈約は「郊」を自分が万物と調和した空間と見出している。しかし、第一章の考察によれば、「郊」は寂寥感が漂っている空間であり、沈約の悲哀を表している。なぜこの調和した空間に悲哀が溢れているのか。

我が身が万物と同化し、自らの性に従って生きるのは、確かに沈約の求めている生き方である。ところが、彼はどのように万物を認識しているのか。

沈約は自分を万物の一つと認めている。また、第二章の考察によつて、「郊」という空間が沈約とともに同じ歴史を閲しており、彼の自画像のような存在であることを明らかにした。そうであれば、「郊」という空間も万物の一つといえるのではないか。さらに考えてみると、「郊」は理念的な空間であり、歴史の記憶や人の感情などの形がない抽象的なものをも内包している。そして、沈約は「郊」を仏道修行の道場にし、この道場に我が心を棲まわせる願望を寄せ、さらに、仏教の慈悲の教えによつて、この「郊」において万物が自由自在になることを希求している。それで、おそらく沈約の考えている万物は、生を有するもの、あるいは有形のものだけではなく、抽象的なものもその中に含まれているといえるであろう。つまり、「郊」という理念的な空間も、沈約と「郊」の共有している歴史も、また、「郊」に漂っている寂寥感も、その寂寥感に繋がっている沈約の悲哀も、みな「郊」という空間において仏教の慈悲の光に照らされ、自らの性を得ている。

沈約の悲哀はネガティブな感情であるが、その悲哀も万物の一つとして、「郊」という空間に他のものと調和しつつ、自らの性を得ることから、沈約はその悲哀の存在を認めているであろう。

## おわりに

以上、「郊居賦」における「郊」という理念的な空間の有様を分析し、賦に現れた沈約の空間意識を考察してきた。全体的に見ると、「郊」は荒れ果てて物寂しいさまであり、沈約の悲哀を表している。

沈約の悲哀は彼の歴史家としての自覚から生み出されたものであると考えられる。「郊」は沈約とともに、時代の変遷と王朝の更迭を闊しているため、「郊」という空間を作る時、沈約は歴史を振り返ることによって、自分の在り方も確かめている。東郊の昔日の繁華と今の曠野との対比から沈約は自分自身のことを連想するであろう。若いころ東郊に遊びにいた青年は今三つの王朝に仕えた老人になつてゐる。この対比から沈約は大きな悲哀を感じており、その悲哀を「郊」という空間の基盤としている。

また、沈約は「郊」を仏道修行の道場とし、仏教の慈悲の教義によつて、万物と同化することを希求している。ところが、彼の考えている万物には抽象的なものも含まれていると考えられる。もしそうであれば、沈約の悲哀もまたその万物の一つであり、彼自身と同化して、「郊」という空間に自分の性を得ることは、この調和した世界に矛盾していないといえよう。

沈約は「郊」という理念的空間を仏道修行の道場としているが、ただ仏教の慈悲の教えに憧れ、仏道修行によつて自己超克することを希求しているわけではない。おそらく彼にとつて、「郊」という空間は精神的苦痛から自分を解放する「場」ではなく、その苦痛をも自分の一部分と認めて、自分自身と調和する「場」であると考えられる。

## 注

- (1) 『梁書』卷十三沈約傳「立宅東田、囑望東郊。嘗爲郊居賦」。『梁書』は中華書局版（中華書局、一九七三年）を用いた。
- (2) 『梁書』卷三十三王筠傳「約制郊居賦、構思積時、猶未都畢」。

- (3) 『莊子』 大宗師「適人之適、而不自適其適者也」。
- (4) 魏斌『山中的六朝史』「鍾山與建康東郊」(三聯書店、二〇一九年)は建康の東郊の開発の歴史について考察している。同書二九四頁に、「齊梁時代、東田已由原先比較純粹的農業性郊區、發展成為融合皇室貴族園宅、寺院、道館、學館等多種文化性建築的地理區域」とある。
- (5) 今場正美『沈約『郊居賦』譯註』(『學林』第二十七号、一九九七年) 八七頁―一二二頁。
- (6) 中森健二『沈約『郊居賦』について』(『學林』第三号、一九八四年)は「郊居賦」を八つの段落に分けて、それぞれの内容について詳しく説明している。また、林家驪『沈約研究』(杭州大学出版社、一九九九年)も段落ごとに「郊居賦」の内容を述べているが、賦を七つの段落に分けている。
- (7) 『莊子』在宥「出入六合、遊乎九州、獨來獨往、是謂獨有」。沈約『宋書』隱逸傳論「及逸民隱居、皆獨往之稱」。
- (8) 『宋書』卷九十三隱逸傳論「易曰、天地閉、賢人隱。又曰、遯世無悶。又曰、高尚其事。又曰、幽人貞吉。論語作者七人、表以逸民之稱。又曰、子路遇荷篠丈人、孔子曰、隱者也。又曰：賢者避地、其次避言。又曰、虞仲、夷逸、隱居放言」。隱逸傳論において、沈約は真の隱逸が「身隱」ではなく、「道隱」であると主張しているが、従来の隱者・逸民たちが辺鄙な場所に隱遁することを認めている。
- (9) 齋藤希史「關於『居賦』——閑居賦、山居賦、郊居賦」(『第四屆辭賦學學術研討會論文集 國際辭賦學論文集』江蘇教育出版社、一九九九年)は、「他如此描述的方式接近於招隱詩而且表示孤高隱居的精神」と述べている。
- (10) 『文選』卷二十二に収載。
- (11) 賦の原文に「因葺茨以結名、又觀空以表號。得忘己於茲日、豈期心於來報」とある。
- (12) 『梁書』卷十三沈約傳「初、約久處端揆、有志台司、論者咸謂爲宜、而帝終不用、乃求外出、又不見許。與徐勉素善。

遂以書陳情於勉……勉爲言於高祖、請三司之儀、弗許、但加鼓吹而已。

- (13) 藤原尚「隱遁の賦」の流れよりみた『郊居賦』の位置（『支那学研究』三十一卷、一九六五年）は「郊居賦は時間的であるといえよう」と指摘し、賦において沈約が自分の先祖と過去の王朝を振り返ることを提示している。前掲注（6）の中村健二「沈約『郊居賦』について」には「南朝の興亡と史実をたどり、沈氏の歴史をこれに重ねあわせる。過去を振り返ることで、己の基盤を確かめようとする」と述べられている。また、前掲注（9）の齋藤希史「關於『居賦』閑居―賦、山居賦、郊居賦―」には「郊居賦以历史谈自己」と指摘されている。

(14) 齋藤希史前掲注（9）論文は「郊居賦」の自伝性について、『郊居賦』詳述被時代の起伏玩弄的沈氏一族來歴和自己的經歷、結果強調世間難定、人世無常」と述べている。

(15) 魏斌前掲注（4）著書三〇五頁参照。

(16) 神塚淑子「沈約の隱逸思想」（『日本中国学会報』第三十一輯、一九七九年）。

(17) 吉川忠夫「沈約の思想」（『六朝精神史研究』所収、同朋舎一九八四年）。

(18) 『廣弘明集』卷二十六。